

児童の主体性の構築を目指した防災マップの作成に関する研究
 一四万十町興津地区を事例として—
 Study on Creation of Disaster Prevention Map Aiming at Independence of Children

○岡田 夏美・矢守 克也

○Natsumi OKADA, Katsuya YAMORI

In recent years, by creating hazard maps and disaster prevention maps, it is aimed to improve regional disaster prevention capabilities. However, it is meaningless unless discoveries on such maps lead to actual disaster prevention measures. In other words, it is important that dangerous places in map creation become safe places. In the Okitsu district of Kochi prefecture, Such a "danger → safety cycle" has been achieved on the map, elementary school students have created disaster prevention maps for more than 10 years. However, because it is continued for a long time, there is also problem that has become manifest. In order to overcome such problem this year, we worked on "creating a map to connect with local people". Children could have an identity to the disaster prevention of the region, and found the possibility as "exchange and interact tool" instead of using disaster prevention map as mere information transmission tool.

1. はじめに

近年、地域の防災活動を活発にするための手段の一つとして、防災・ハザードマップの作成や内容の充実が目指されている一方で、そのような防災・ハザードマップの作成が、住民の被害軽減行動に結びついていないことが課題として指摘されている(里村, 2006)。そうした課題を克服すべく、説明会を開催したり、形を変えてポスターにしたり、手帳サイズにして持ち運びができるようにしたりなど、見やすいデザインへの工夫がなされている(榎村, 2012)。しかしながら、そうしたマップ上の発見や成果が、現実のソフト・ハードの両面に対する防災へのアクションに結びつかなければ、それらは意味をなさない。つまり、マップの形態を変え、中身を充実させたとしても、現実のハード面の改善はなされたのか？足を取られそうだとメモされた箇所側の側溝にはフタがついたのか？倒れてきそうと判断されたブロック塀などは、補強・撤去されたのか？避難訓練になにか変化が見られたのか？といった、現実の課題が実際に改善される必要がある。

そうした中で、本研究の対象地である高知県四万十町興津地区は、防災マップを作成する→そこで発見されたまちの課題を改善する→さらに見直して、次の課題へとつなげるため、防災マップを作成する→…というサイクルが成立している地域

である。興津地区の防災マップは、小学校 5・6 年生が作成している。こうした防災マップサイクルが成立している地域において、防災マップの作成を通して、作成者である児童が、地域の防災に対して主体性を持つことを目指して行ったアクションリサーチについて、本稿では報告する。

2. 興津地区における防災マップの位置づけ

興津小学校が 2005 年に文部科学省の「地域ぐるみ学校体制推進委員会モデル事業」の指定を受けたことをきっかけとして、同小では、10 年以上、毎年継続して 5・6 年生が防災マップを作成してきた。興津地区では、児童が作成した防災マップをもとにして、防災行政・施策の変化が目に見える段階まで実施し、かつその過程をフォローするという点で、長期的視点に立った防災教育を実施している(矢守・千々和, 2017)。例えば、2007 年度のマップがきっかけとなって、保育所と高齢者福祉施設の高台移転が決定し、実現した。さらに 2016 年度には、夜間のまち歩きとマップ作成の結果から、夜間の避難道に蓄光マーカーが設置された。そのように改善された箇所を、次の新 5・6 年生が新しいマップ作成の過程でチェックすることで、長期的に継続してフォローしている。このように、興津地区の防災事業においては、①児童が防災マップを作り、課題を発見する⇒②地域住民・行政が実現する⇒③児童が次の防災マップ作

成の過程でチェックする、というサイクルが成立しており、同地区における防災活動では、児童が作成する防災マップが基本となり、地区において大きな意味を持っているといえる。

3. 防災マップが抱える課題

このように継続して作成されてきた防災マップであるが、それが10年以上続き、完成品も20枚を超えると、次のような発言が学校教員から出された。「こうして10年以上毎年（マップを）作ってきて、正直、出尽くした感があります。」

同地区で現在最も懸念されているのが南海トラフ地震による津波の被害であるため、津波避難を前提とした防災マップが多いが、それにとどまらず、土砂災害をテーマにしたマップや、昼間だけでなく夜間の災害対策をコンセプトにしたマップなど、毎年、いろいろな課題に対応できるよう工夫されてきた。

しかしながら、こうしたマップ作成は、先の発言に見られるように、学校や地域に有用な活動となる一方で、マンネリ化も招いてしまっている。実際、地域住民からも、「もうたくさん（マップが）出来てきていて、（防災教育として）他のことをしてもいいんじゃないかな、と思うの。」という言葉が聞かれた。こうした地域住民の発言の背景には、児童が作成している防災マップのコンセプトが地域住民にしっかり伝わっていないという新たな課題も透けて見える。学校防災教育の観点からは、防災マップを作成することだけでもよい学習になり得る。事実、同地区においては、そのマップが地域の防災事業に反映させられてきたが、以上のように、さらに新たな展開が求められてきている。こうした課題を克服すべく、学校と地域を媒介するような防災マップの新たなあり方を模索した。

4. 防災すごろくマップづくり

以上のような現状を踏まえ2018年度には、学校教員との協議の結果、防災マップそのものの前提を捉え直し、「地域のことを盛り込んだマップ」ではなく、「地域（の人）と触れあうための媒体としてのマップ」づくりを目指した。学校と地域をつなぐためには、そのマップ自体が使用され続けられるものであることが求められる。その表現形態の一つとして、すごろくという手法を選択した。具体的には、興津地区の地図上で、実際の場所での現状がすごろくのマス目のイベントとして発生する仕組みとし、そのイベントは、児童のまち歩きからまとめられ、大きく3つのイベント属性に

分類することができる。①興津地区の歴史・文化、②防災上、準備が整っていること、③防災上、準備が未だ整っていないことである。例えば、②には、「避難場所で簡易トイレが用意されていたので、トイレで困らなかった」というようなイベントが当てはまる。プラスのイベントであればコインをゲットすることができ、反対にマイナスのイベントであれば、コインは没収されるゲーム性を与えた。

5. 防災すごろくマップの活用

「地域（の人）と触れあうための媒体としてのマップ」を実現するために、小学校が毎年開催している学習発表会において、すごろくマップで“遊ぶ”時間を設けることとなった。この“遊ぶ”ためのファシリテートをマップの作成者である児童に任せる予定をしている。（この会は2月23日に開催されるため、全体の結果の報告は間に合わないが、1月30日にそのための事前準備授業を行うため、そこまでに得られたデータを報告する。）

毎回この学習発表会には、地域住民が大勢参加するため、マップのお披露目会としても期待できる。地域住民と児童、保護者、教員と一緒に同じマップを囲んで“遊ぶ”ことで、矢守(2012)が指摘するような、交流と交換の「道具」としてマップを位置づけることを目的としている。

マップが完成した段階で、児童からは、「危ないところ、いいところをしっかりと分けて分かりやすくしたこと」を一番頑張ったので、「地域の人とやって楽しく学びたい」という発言があった。自分たちがこだわって作成したマップを、作っていない人と一緒に囲みながら議論するためのファシリテートをすることで、児童には、地域の防災活動の一端でありスタート地点を担っているんだという意識が醸成されることを期待している。

【参考文献】

- 里村亮：仙台市における町内会防災マップの作成と住民の被害軽減行動への効果，季刊地理学，Vol. 58， pp. 19-29， 2006.
- 榎村康史：洪水ハザードマップの住民認知・理解向上に向けた改善に関する研究，土木学会論文集，Vol. 68， No. 5， pp. 103-110， 2012.
- 矢守克也・千々和詩織，長期的な視点に立った防災教育の検証・評価に関する考察，第36回自然災害学会学術講演会公演概要集，2017
- 矢守克也・渥美公秀編，防災・減災の人間科学 いのちを支える、現場に寄り添う，新曜社， pp. 102-107， 2012